博士論文要旨

氏名	鵜野ひろ子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	乙第２号
学位授与年月日	平成14年３月19日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第５条２項の規定による
学位論文題目	Life in “Marble Disc”: Emily Dickinson’s Poetry

論文内容の要旨

エミリ・ディキンスン（1830–1886）は30歳を過ぎた頃、「拒絶」についての詩を書き、白いドレスを身に纏い、所謂「隠遁生活」を始めた。しかも同じ頃、大量の詩を清書し、幾つもの手製の冊子に纏めた。そしてそれらを出版することなく、死後になって約1800篇の詩が発見されるまで、詩人としては無名のまま生涯を終えた。何故彼女が世間から身を隠すようになったのか、また何故この時期出版の見込みがないことを知りながら詩を編集し始めたのか、未だに謎のままである。

本論ではそのような謎を解くため、ディキンスンの詩や手紙を分析することによって、まず彼女の「沈黙」や「否定」、「拒絶」観について考察した。彼女のそのような心的態度については、従来伝記的、心理学的アプローチ、あるいはフェミニズムの視点からのアプローチ等が行われてきた。本論ではその主たる原因が、彼女が関心を抱いていた科学の分野と関係があるのではないかということに着目した。彼女は19世紀半ばに信仰と科学との狭間で大きく揺れ動いたが、当時の科学の知識を採用することによって、独自の物の見方や生き方を見出した。しかもその科学分野が、比較的無機的な天文学、物理学（光学）、化学、地質学であったことが、「沈黙」、「否定」、「拒絶」といった内面的態度に大きく関わったのかもしれない。ディキンスン研究の中でも、このように「隠遁生活」と「出版の断念」を、科学への関心と結びつけた研究は未だなされてはいない。特に第９章と10章は、彼女が当時の科学知識をいかに詩の中に取り入れ、それによって心の問題を解決しようとしていたことを証明したものであるが、第10章の前半の元となった論文は、Alfred Habegger 著 *The Life of Emily Dickinson*（*Random House*, 2001）の中で、論者著 *Emily Dickinson Visits Boston*（1990）と共に紹介されている。

第１部ではディキンスンの言語および沈黙観を考察し、沈黙も言葉と同様に伝達の一つの手段と信じ、詩作に際して、言葉の節約や、ダッシュの使用、摩擦音Ｓや閉鎖音Ｔの使用によって、即ちそのようなテクニックから生み出される沈黙と簡潔な言葉の組み合わせによって、またそこから生じる曖昧性によって、沈黙に秘められた美を巧みに表現したことを証明した。

第2部では、ディキンスンの様々な否定語による表現が彼女の外界に対する一見否定的に見えるが、実は逆説的な姿勢と結びついていること、彼女が「節約」、「不可能性」、「白色」などに高い価値を見出していること、さらには究極の否定である「無」は彼女の詩の中では「全」でもあり、無限の可能性を秘めたものとなっていること等を証明した。また彼女の「白い」「生における死」のような一見否定的な生き方は、独自の詩の世界を守り、永遠に白い光の「輪」を広げていくような詩を書くための積極的な選択であったことを論じた。

第3部では、30歳を過ぎた頃の眼病およびその治療の経験や、レンズのdiscを幾つも組み合わせて作られた望遠鏡や顕微鏡など、当時最新の光学機器を使った経験や、天文学の知識から、ディキンスンが独自の物の見方を持つようになったことを論じた。また、このように裸眼では見えない物まで見せる光学機器が発達した時代になると、心の中まで覗かれるのではないかと彼女は恐れた。そこで、彼女は半ば閉じた扉の陰から外の世界を開いた片目で覗きつつ、もう一方の閉じた目で心の中を探り、詩を書き残したのである。

第4部前半では、ディキンスンが、当時エドワード・ヒッチコックなど敬虔な科学者たちが聖書に書かれている事柄と科学研究によって発見された事実との矛盾を解決しようとしていた努力に興味を持ち、化学、特に原子論などの知識を利用して彼女独自の解決を見出そうとしていたことを、彼女の使った教科書や雑誌などを使って証明した。特に、ヒッチコックが、地上のあらゆる行為は他の創造物に影響を与え、砂岩に絶滅した生物の足跡が化石として残るように永遠に残ると論じたことは、ディキンスンが異常にプライバシーが侵害されることを恐れたり、自分の詩を石に喩えて残そうとしたことと関連がある。後半では、ディキンスンの地質学の知識がいかに彼女のユニークな生き方と関連しているかを論じた。ディキンスンは特に化石に興味を抱いた。また絶望の末に、わざと精神的にも肉体的にも冷たく麻痺した「石」のようになって、地獄のような苦しみを耐えぬこうとする状況を描いた詩を書いたが、そのような生き方を「墓の科学」や「生き延びるための術」と呼んでいる。

このように、独自の「沈黙」、「無」観から、また独自の物の見方から、さらには科学の知識から、ディキンスンは生前、編集者に妥協をしてまで詩人として認められることを潔しとせず、独自の詩の世界を頑なに守り、敢えて詩人としての死を選んだのである。そしてその魂を詩に刻み付けることによって、言いかえれば自身が詩という「化石」、あるいは白い墓石、あるいはMarble Discとなって、後世の読者と対面しようとしたのである。このような生き方を彼女は「拒絶」、「墓の廃棄」、「白い偉業」等と呼んでいるが、これは否定を肯定に変えるものであり、現世において「無」を選び、後世に「全」あるいは「永遠」、「不死」となる選択であったと言える。それ故実際、彼女の詩は彼女の死後、数十年を経て、20世紀半ばになって発掘され、蘇り、今なお白い光の輪を広げ続けることができるのだと、結論づけたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、アメリカ文学史上「謎」とされているエミリ・ディキンスンの「隠遁生活」と「出版の断念」を、19世紀中庸における科学の進歩と信仰（ピューリタニズム）との相克という視点から解明することにある。ディキンスンの「隠遁」については、伝記、心理学、女性学などの分野から研究がなされてきたが、明確な解答はまだ出されていない。また、ディキンスンの作品中の科学への言及に関する研究はすでになされているが、「隠遁」の主要原因として挙げているものはない。

本論では、ディキンスンの詩や手紙の中に「沈黙」、「否定」、「拒絶」など、否定的な響きをもつ表現が目立つことに着目し、その原因を作者が興味を抱いていた天文学、物理学（光学）、化学、地質学など、比較的無機的な科学の分野と関係があったのではないかと推論し、証明を試みている。

第１部では、ディキンスンの詩における「沈黙」の分析を行う。「沈黙」が表現の拒否ではなく、言葉に劣らぬ伝達の手段として、秘められた美を体現していることを、言葉の節約や、ダッシュの使用、摩擦音Ｓや閉鎖音Ｔの使用などのテクニックの分析から立証している。

第２部では、ディキンスンの「否定」表現を取り上げ、それらが外界の否定ではなく、積極的な関心を内包していると主張し、「節約」、「不可能性」、「白色」、「無」などの概念が、究極的には正反対の意味さえもちうる可能性を秘めたものであると分析している。

第３部では、ディキンスン自身が体験した眼疾と、望遠鏡、顕微鏡、写真機など、当時最新の光学機器が結びつき、物事を同時に別の角度から見る Compound　Vision を形成したことを立証している。扉の陰に身を隠す生活の中で、片目は自らの心の中を客観的に探りながら、もう片方の目は光学機器を通して外界を科学的に観察しつつ詩を書き残したというのである。

第４部では、科学上の新発見と聖書の記述事項との矛盾を解消しようとした当時の敬虔な科学者達の努力が、ディキンスンの詩の中にいかに反映されているかを探る。特に死後の生命という問題について、ディキンスンが出した解答は、魂を未出版の詩に刻み付け、その詩が未来に発掘されることで、詩と共に蘇ることであった。

以上の論考を通して、論者は、ディキンスンの詩や手紙の中に多用されている「沈黙」、「否定」、「拒絶」などの観念が、必ずしも否定的な意味合いをもたないのは、それらが科学的思索の結果生じたこと、さらにそこから、科学と信仰との間隙を埋める独自の解決策を見い出したからであることを立証する。そして、ディキンスンの「隠遁生活」と「出版の断念」は、否定的・消極的な行為ではなく、積極的に Marble　Disc―白い墓石、あるいは「化石」となって、後世の読者と対面しようとする積極的な態度の表れであったと結論づける。

たとえば文学と科学という異分野を結びつけようとするこの種の試みは、ともすれば理論のみが先行し、牽強付会に陥りがちであるが、本論文の場合、論者の仮説が、ディキンスンの詩の丹

念な読解から生まれ、さらに、ディキンスンが愛読した科学の教科書、科学雑誌を求めて、ディキンスンの生地を中心に行われた精力的な資料調査に基づいている。論者の主張の信憑性は、すでに国際学会で評価されていることからも明らかであるといえよう。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位論文として十二分に合格に値すると判定する。

2002年２月26日

主査　山田由美子

副査　泥谷　征人

副査　新倉　俊一